

「高知カツオ県民会議」拡大準備委員会（第1回）

2017年2月9日（木）15:00～17:00

ホテル日航高知旭ロイヤル

○司会（松岡・高知広告センター）

皆様、こんにちは。ただ今から「高知カツオ県民会議」拡大準備委員会を開催いたします。

私は、準備会事務局を務めております高知広告センターの松岡と申します。後ほど、規約なり、体制が決まりますまで進行を務めてまいります。どうかよろしく願いいたします。

本日は、大変たくさんの皆様にご出席をいただいております。随分窮屈な場所もございますけれども、2時間、充実した会議にしてみたいと思いますので、お付き合いのほど、よろしく願いいたします。

まず、本日の配付資料の確認をさせていただきます。お手元をご覧くださいまして、「高知カツオ県民会議拡大準備委員会配席図」、それから「議事次第」、表紙に「高知カツオ県民会議規約（案）」とある左肩を綴じた7ページの資料、それから同じく左肩を綴じました「高知カツオ県民会議拡大準備委員会出席者・参画予定者」別表1という資料、最後に、「日本カツオ学会資料」、以上となっております。抜け落ちがある方、お手を挙げていただきましたら事務局のほうがお届けにあがります。ご確認、よろしいでしょうか。はい。ありがとうございます。

本日、ご出席の皆様は、事前にお送りいたしましたように、設立趣意書にご賛同いただいた皆様でございます。配席表でございますように、各種経済団体、市場関係者、流通・小売り、漁業者、観光、運輸、料理・飲食、金融機関、行政、教育機関、そして、マスコミ、個人の皆様が、総勢75名あまりでご出席をいただいております。誠にありがとうございます。

本日の進め方でございますけれども、まず、県民会議の規約（案）について皆様方にお諮りをしまして、役員など、活動の基礎となる体制を決めさせていただいた後に、立ち上げ趣旨や分科会活動、4月に予定しております本格的な活動のスタートとしてのシンポジウムについてお諮りしたいと考えております。

そして、意見交換の時間としまして、カツオの資源状況や県の取り組み、国際的な動向などについて、高知県及び加寿翁コーポレーションの竹内社長様から少し詳しくご報告をいただきまして、皆様と情報共有させていただき、活発な意見交換ができればと思っております。どうかよろしく願いいたします。

それでは、議事に入らせていただく前に、立ち上げ準備委員会メンバーを代表いたしまして、株式会社丸三、岡内会長より一言、皆様にご挨拶を申し上げます。岡内会長、よろしく願いいたします。

○岡内（株式会社丸三 代表取締役会長）

皆さん、こんにちは。本日は、「高知カツオ県民会議」の設立のため、拡大準備会ということでご案内をいたしましたところ、このように多くのご参加を賜り、誠にありがとうございます。

カツオ資源現状に危機感を持ってくださっている県内各界の皆様方のご参加をいただき、準備が進みますことを大変心強く思っております。この「カツオ県民会議」の設立に向けた動きの発端は、高知大学の受田副学長が長く取り組んでこられた「日本カツオ学会」の取り組みから生まれたものでございます。

本来、この場で受田先生がその思いを含めてご挨拶をいただくべきところでございますが、残念なことに、昨日、インフルエンザにかかれまして、急遽、代役ということで、同じ準備会のメンバーの私がお挨拶をさせていただいております。ご本人もさぞかし残念なことだというふうに思っております。

「日本カツオ学会」では、研究者や漁業者、関係自治体などのご参加により、カツオがだんだん捕れなくなっているということについて、高知県や宮城県などでセミナー・フォーラムを通じて情報共有や発信をされてきました。後ほど、詳しくご報告があると思いますが、大きな原因は、太平洋の赤道域での日本のほうまで北上してくる前に大規模なまき網漁業により大量漁獲し、ツナ缶として世界中に販売されている。このことによりまして、カツオ資源が非常に少なくなっているということでございます。

WCPFC という国際的な資源管理組織において、日本は資源管理の強化を主張してまいりましたが、なかなか壁が厚く、大きな前進が見られません。そこで昨年、高知県で開催されましたセミナー・フォーラムにおいて、本日、ご参加の司の竹内社長さんから国際的な協議を力強く進めていくために、もっと広く県民、国民の皆様の世論を高め、国の国際交渉を後押ししていくことが必要ではないかというご提案をいただきました。

県民運動としての「高知カツオ県民会議」の設立に向けた準備が始まったところでございます。

県のほうでも早くからカツオの水揚げに異変を感じ、国に対して国際的な資源管理の強化を求める政策提言を続けているということでございます。ここ3年ほどは、県内水揚げは過去最低水準ということで、危機感は一層強まっており、県としてもこの「カツオ県民会議」を、足並みを揃えて取り組んでいただいております。

カツオは高知県の県魚であり、食文化や観光面でも最も重要な資源でございます。本日、皆様方のご賛同を得て、「高知カツオ県民会議」の実質的な活動をスタートさせ、一刻も早く高知に、そして日本にカツオを取り戻すことができますよう祈念を申し上げて開会のご挨拶とさせていただきます。どうかよろしく願いいたします。

○司会（松岡・高知広告センター）

岡内会長よりご挨拶を申し上げます。

それでは、議事に入らせていただきます。お手元の資料の中で「高知カツオ県民会議規約（案）」をご覧いただきたいと思います。詳しくは皆様ご一読をお願い申し上げまして、ポイントの部分のみご説明をいたします。

まず、第1条、名称は、高知カツオ県民会議とします。

第2条、目的は、高知県の県魚であり、高知を代表する食素材であるカツオを高知に、そして日本に取り戻すこととございます。

第3条、事業内容でございますが、大きく4つの活動を行っていくこととしており、「情報の発信について」、「カツオ漁業及びカツオ資源の消費のあり方について」、「カツオ資源の調査・保全について」、「カツオの食文化について」の4つでございます。

第4条、委員及び組織です。まず、委員ですが、本日まで参加の皆様をはじめ、別表1の委員予定者名簿にあります趣旨にご賛同いただいた皆様となります。

第2項では、会長1名、副会長5名、監事2名を委員の互選で、会長代理を副会長から指名すること。

第3項では、事業を具体的に検討するのは、第6条で定めるところの幹事会としております。

第6条、幹事会には、幹事長1名、副幹事長3名を置くこととしております。

ページをめくっていただきまして、第7条、分科会についてです。分科会の具体的な内容については、後ほどご報告がありますが、第3条の事業内容を具体的に進めていくために、それぞれ分科会を設置し、座長、副座長を置くこととしております。

第9条では、具体的な事務や会計を統括するため、事務局及び事務局長を置くこととしております。

第10条、雑則については、会費の取り扱いなど、本日詰め切れない詳細な内容について、別途定めようとするものでございます。

最後に附則でございます。施行日は、本日、2月9日をもって施行日としておりますが、今後分科会の体制や具体の事業計画など、詳細な準備を進めまして、本格的なスタートは4月に予定をしておりますシンポジウムを皮切りにしたいと考えております。

規約（案）は標準的なものを参考に作成しております。皆様の中で何かご質問はございますでしょうか。

ないようでしたら、この規約に沿って進めてまいりたいと思いますけれども、拍手でご承認いただけますでしょうか。

【拍手】

○司会（松岡・高知広告センター）

ありがとうございます。

それでは、2つ目の議題であります、会長、副会長、監事を、今申し上げました規約第4条に基づき選任いただきたいと存じます。

本来選任方法もお諮りをして進めるべきところでございますが、事前に案を作成させていただいております。お手元資料3ページに、「組織図（案）」がございます。右のほうにカツオのイラストがある「カツオ県民会議」と書いた体制案でございます。

会長は、高知県知事。カツオは県の重要な資源であり、その資源を回復させることは、県民全体のためになる公益性の高い活動であるということで、既にご内諾を尾崎知事のほうにいただいております。

副会長は、お手元の資料でございます5名の方。高知商工会議所・青木会頭、それから、高知大学・受田副学長、中土佐町・池田町長、高知県かつお漁業協同組合・中田組合長、高知新聞社・宮田社長の5名。

そして監事は、金融機関からお二方ということで、これもお手元の資料にあります、四国銀行・山元取締役頭取、高知銀行・森下取締役頭取。

会長代理につきましては、高知大学・受田副学長とさせていただきます。

なお、幹事長や副幹事長は会長が任命、分科会座長などは分科会参加者の互選で決めることとなっておりますので、ここにはその案を資料の下のほうにあわせて掲載しております。

今、申し上げました事務局の組織図（案）、皆様、ご異論なければご承認をいただきたいと思っております。

【拍手】

○司会（松岡・高知広告センター）

ありがとうございます。

それでは、今後の進行につきましては、従来であれば、「会長に」というところでございますけれども、本日、尾崎知事は出席できておりません。また、会長代理の受田副学長も先ほどの理由で本日は欠席をさせていただきます。

準備会議を代表しまして、岡内委員のほうに今後の進行をお願いしたいと思います。

岡内さん、よろしく願いいたします。

○岡内（株式会社丸三 代表取締役会長）

それでは、本当に代役でございますけれども、進行をさせていただきます。幹事並びに委員の紹介でございますが、まず、この副会長さんは、産、学、官、漁業、そしてマスメディアの代表の5名の方が副会長さんということで、ちょっと補足をさせていただきます。

それで、幹事会でございますが、幹事会のまずメンバーは、「カツオ県民会議」の準備会のメンバーをもって充てるということで、7ページをご覧をいただきたいと思っております。こ

の受田さん以下このメンバーで6回ほど協議を重ねて本日に至ってまいりました。このメンバーが幹事会メンバーであります。

この幹事会、準備会を座長としてリードいただきましたのは、受田先生でございますので、幹事長に受田先生、そして、もともと言い出しべいの一人であります、加寿翁コーポレーションの竹内社長、そして、県の水産振興部副部長の近藤さん、不肖私ということで副幹事長を務めさせていただきます。以上が幹事ということでございます。

それでは、幹事の方は、ちょっとお立ちいただけますか。こういったメンバーで準備を進めてまいりましたので、今後もこの県民会議に諮るための準備、段取りをこの幹事団でやらせていただきたいと思いますので、どうかよろしく願いいたします。

○岡内（株式会社丸三 代表取締役会長）

それでは、「高知カツオ県民会議」の立ち上げにつきまして、お手元の資料の5ページ目をご覧くださいと思います。

まず設立の趣旨ということでございますが、5ページ目の上段2行目にあります、「カツオを愛するあらゆる人々が相互に交流・連携して、協働の図れる場として、この県民会議を位置づけ、カツオに関する様々な取り組みに着手することで、高知に、そして日本に一刻も早くカツオを取り戻したい」ということが一番の主眼の眼目であります。

そして、分科会というところに入らせていただきたいと思います。その5ページの下の方に、「上記活動を企画、運営するための分科会を県民会議の下に設置する」ということで、4つの分科会を設置したいと考えております。カツオ情報発信分科会、カツオ消費・漁業分科会、カツオ資源調査・保全分科会、そして、カツオ食文化分科会でございます。

なお、カツオ情報発信分科会につきましては、メディア（新聞、テレビ、雑誌、SNSなど）の力を結集して、カツオ資源の現状と将来予測について不断に、かつ戦略的に発信する機会を企画・協議・実行する。さらに県民会議として、全県的、全国的な発信を目的とするシンポジウムの企画や、「全国豊かな海づくり大会」との連携についても協議、提案するというところでございます。

また、消費・漁業分科会につきましては、カツオ資源の持続可能性を担保するうえで、漁法を含めたカツオ漁業、及び市場における県民、並びに高知県における旅行者の消費行動のあり方は極めて重要であります。各人の消費行動をあるべき姿に導くために、高知県におけるMSC、MELの普及啓発を進めるとともに、カツオの持続可能性を追求した消費者行動の指針を確立する。このMSC、MELにつきましては、次のページに説明を添付してありますので、ご覧をいただきたいと思います。

カツオ資源調査・保全につきましては、カツオ資源の維持可能性を科学的に、かつ全球的に調査する事業の側面支援を目的に、調査研究の加速化を目指した資金援助、例えば、クラウドファンディングによるカツオアーカイバルタグ標識、調査の支援などを行うと共に、IoT技術などの先進テクノロジーの社会実装を可及的速やかに進めるための体制整備を

進める。

4番目のカツオ食文化分科会につきましては、和食の根幹を成す出汁に欠くことのできない、かつお節をはじめとするカツオの食文化に関する情報収集と県民への啓発活動を目的に、各種食育活動の協議、企画、実践、並びに「土佐カツオマイスター制度」の立ち上げと推進を狙うということでございます。

以上のような大まかな分科会につきまして、方向づけの中で運営をしてみたいというふうに考えております。

このあたりで活動の概要につきましての皆様方のご意見を賜りたいと思いますが、挙手のうえ、お願いいたします。

はい。どうぞ。

○横山（土佐御苑）

土佐御苑の横山と申します。

ぜひ、全国にPRをしてもらいたいのは、カツオの旬でございます。今、一年中、年がら年中カツオが食べれるというふうに思われている方もたくさんいらっしゃって、旬が年に2回来る食材ってなかなかないなと思います。春と秋に、解禁とまではいきませんが、「旬宣言」を知事、市長はじめ、関わる首長さんが集まって全国に発信をすると。そして、あとの冬と夏に関しては、それぞれの食材がまたとんがりを見せれるだろうというふうに思いますので、願わくば、解禁宣言、それが叶わなければ旬宣言をしっかりとこの旬2回、いろんな方に行っていければなというふうに思っております。

旅館ホテルも非常に仕入れの厳しいときに、仕入れがかさみますと、金額はそのままで仕入れは高騰したままだということで、飲食店も非常に厳しいです。なので、この旬を明確にすることで、ほかの旬の食材がまたクローズアップされることだと思っておりますので、この旬宣言もぜひご検討いただけたらというふうに思います。

○岡内（株式会社丸三 代表取締役会長）

はい。ありがとうございます。ぜひカツオの「旬宣言」というのは、年がら年中、素晴らしいカツオが高知にあるという事実のうえに立って、旬ということもさらに強調するような動きができたらというふうに考えております。

ほかに、ご意見、ご質問ございましたら。

はい。黒笹さん、どうぞ。

○黒笹（南国生活技術研究所 代表）

今、横山さん、おっしゃったように、高知は、ここにはいらっしゃいませんけど、日銀の河合さんが「高知はカツオと龍馬に頼りすぎる」というふうに言い置いて東京に去っていったんですけども、私自身も、もちろんカツオは大変に重要なんですけども、それ

以外の高知の魚のクオリティの高さとか、そういうものも、せっかくですから、この大きな「カツオ県民会議」の流れの中に、周辺に配置をされたらどうかと思います。

ですから、横山さんの今のご提案に賛成なんですけれども、例えば、同じカツオという名前が付いていますが、スマの時期もありますし、ハガツオがむしろ本ガツオよりも美味しい時期が当然ございますので、そういう意味で言うと、「カツオ」と名の付く、その周辺の本ガツオ以外のカツオにもしっかりと目配りをしつつ、それぞれの旬がございますので、それもあわせて売っていくという、総合的な取り組みの一つは、こちらからの発信はすべきだと思います。

というのは、高知はそういうさまざまなカツオを旬に応じて食べ分ける。これは文化のほうですけども。それと、それにその時々柑橘を組み合わせる。非常に高度な食文化になっておりますので、そのアピールも当然やっていきたいなと思います。

それから、カツオの資源の問題は、高知県が一番、日本がその、捕るという意味では出口のほうにいると思うんですけども、実際の今の資源の枯渇というのはずっと上流のほうで、しかも国境を越えたところで起きているわけなので、これは高知が単独で闘っても、とてもじゃないけれどもそこまでは手が及ばないと思いますので、これはある意味、国民運動にもしていかなければいけないかなというふうに思います。

一方で、マグロなんかは世界的な議論になっております。ですから、マグロぐらいまでカツオの議論を世界的に巻き起こす、というような志というか、それをこの「カツオ県民会議」の奥のほうに潜ませていただけたらなというふうに思います。

○岡内（株式会社丸三 代表取締役会長）

はい。ありがとうございます。

ご指摘がありました周辺の魚についても総合的に取り組んだらということころは、また幹事会のほうでもまかせていただきたいと思いますが、ある意味、カツオに特化した、強烈に高知県の県民力が国家を動かしていく。そして、国際的な会議の席のパワーのより所になっていくということが今回の県民会議を設立する一番の主眼でありますので、そのへんはそうようにご理解を賜りたいというふうに思います。

そのほかに、ご意見、ご質問ございましたら。

それでは、次に進めさせていただきたいと思います。

資料の最後に運営費用について記載をしております。県民会議の運営には、一定の費用が必要でございますので、詳細は規約第10条の雑則で定めてまいりますが、ここでは案として、個人1口3,000円、団体1口5,000円、数任意ということで記載をしております。さらに、趣旨に賛同する一般の皆様から1口1,000円の賛助金を受けることとしたいと考えておまして、このことも含めて、ご意見をいただき、後ほど定める雑則につきましては、そのうえで幹事会にご一任をお願いを申し上げたいというふうに思います。

この運営につきましての費用部分についてのご意見、ご質問ございましたら挙手のうえ、

お願いいたします。

○司会（松岡・高知広告センター）

今の部分は、綴じた資料の6ページ、最下部のほうに記載をしております。

○岡内（株式会社丸三 代表取締役会長）

まだまだ4月10日の本格的立ち上げの前段の立ち上げというのが今日でございますので、いろんな意味で協議をしていく、議論を重ねていくことが重要であります。その運営費の部分の中心になるのがここへ記載をしております、個人1口3,000円、団体1口5,000円というような考え方があります。

本格的にカツオの保全や調査というようなことを考えるときには、また別途大きな資金が必要になってこようと思いますので、行政からどのようなお金を引き出してくるのか、また、そんなことも含めて、さらに違うやり方の資金確保を考えていく必要があろうかと思えます。いかがでしょう。

○大下（一般社団法人高知県調理師連合会 会長）

すいません。

○岡内（株式会社丸三 代表取締役会長）

はい。

○大下（一般社団法人高知県調理師連合会 会長）

これは年間ですか。

○岡内（株式会社丸三 代表取締役会長）

ええ。年間です。

○大下（一般社団法人高知県調理師連合会 会長）

年間ですか。

○岡内（株式会社丸三 代表取締役会長）

はい。

○大下（一般社団法人高知県調理師連合会 会長）

そしたら毎年この賛助金を集めるという？

○岡内（株式会社丸三 代表取締役会長）

はい。後ほどこの県民会議の、いつまで一体こういう運動を続けていくのかということについても、少し、私どもの現時点での考え方については触れさせていただきたいと思いますが、一応、年々の年間費というような考え方でございます。

それでは、特にご意見がないようですので、続いて4月10日に予定をしておりますシンポジウムについてご報告をさせていただきます。

本日から県民会議としての実質的な活動をスタートし、さまざまな準備を進め、本格的なスタートは4月に会長としての知事の参加もいただき、広く県民も参加できるシンポジウムを皮切りにしたいと考えております。

現時点では、カツオ資源問題に関する基調講演やパネルディスカッションを予定しておりますが、詳細は今後詰めてまいります。現時点では、4月10日（月曜日）15時から、県民文化ホール（グリーン）を予定しております。本日もご参加の皆様方はぜひ広くお声がけをいただき、ご参加をいただきますようお願いを申し上げたいと思います。というのが、4月10日の本格的な立ち上げのシンポジウムについての現時点での案でございます。

何かご意見、ご質問ございましたら。

このことにつきましては特にご意見、ご質問がないようでございますので、フリーな意見交換に入らせていただきたいと思いますと思いますが、その前に、わざわざ今日、県議会でカツオについてのご質問をいただいた土森県議にお越しをいただいておりますので。ありがとうございます。ご紹介を申し上げます。

後ほど、自民党の水産部会長の中西さんがお見えになる予定でございますので、懇親会の冒頭にでもご挨拶をいただくということでご紹介をさせていただきたいと思います。

それでは、まずご意見をいただく前に、高知県のほうから「高知県におけるカツオの漁業の現状について」というご報告を高知県水産振興部漁業振興課の梶チーフからお願いいたします。その後、続きまして、司の竹内さんから「カツオ資源の現状と海外の動向について」ということでご報告いただいたうえで、皆様方のご意見をちょうだいしたいと思います。

それではよろしく申し上げます。

○近藤（高知県水産振興部 チーフ）

皆様、こんにちは。高知県水産振興部漁業振興課の梶と申します。しばらくお付き合いよろしくお願ひいたします。

皆様、お手元に資料も同じものをお配りしているんですけども、まずはこちらのスクリーンのほうをご覧くださいながらお話を聞いていただければと思います。

こちらの写真は、本県が設置しました「土佐黒潮牧場」という浮き魚礁で操業中の沿岸カツオ竿釣船という言い方をしますが、いわゆる一本釣り、釣り漁業の様子です。

私自身はずっと実は技術畑で水産試験場にいた、魚が好きで漁が好きでという人間なも

のですから、こういうばんばんカツオを釣っていただいている写真を見ますと、ワクワクしますし、このカツオ、美味しそうだなというふうに思うんですけれども。こういった高知県におけるカツオ漁業の現状、これがちょっと最近困ったことになってきておりますということを簡単にご紹介していきたいと思えます。

まず、本題に入ります前に、そもそも高知県民、あるいは高知県とカツオの関わりについていくつか簡単にご紹介をしたいと思います。

まず、過去にさかのぼって、そして今に至るところで、古代史、あるいは、ずっと飛ばしまして現代にみる高知県民とカツオの関わり方ということに紹介いたします。高知県西部の中村貝塚という縄文時代の遺跡があるんですけれども、こちらのほうから既にカツオの骨が出土しているという報告がございます。それほど昔から高知県の人はカツオをどうも食べていたらしいということがわかっております。

そして、少し時代が進みますと、奈良時代や平安時代、こういった時代には、朝廷に堅魚（かたうお）を献上していたということが養老令でありますとか、延喜式、そういったものに残させております。

この「堅魚」というのは、おそらくカツオを干して少し硬くした、かつお節の原形のようなものかと思えますが、これがなまって「かたうお」「かたうお」「かつお」になった、あるいは、魚偏に堅いと書くのはここから来ているというようなことが言われております。

このように昔からカツオを消費してきた高知県なんですけれども、現在じゃあ、どのぐらいカツオに関わりがあるかと言いますと、1世帯あたりのカツオの購入量という調査がございます。全国の県庁所在地の統計があるんですけれども、全国平均がこちら、2位の福島、水戸、仙台、盛岡と、大体このあたりにあるのに対しまして、高知市、ぶっちぎりの2倍ぐらいの差をつけて1位ということで、これは統計がある限り1位の座を譲っておりません。これほど昔から、そして、今に至っても高知県民はカツオと深く関わりながら生きてきたと言えると思えます。

それでは、私ども水産振興部が関わってきます、この高知県のこのカツオをどういうふうに捕っておられるのかと、漁業における位置づけというのを見てみますと、過去10年ぐらいを平均してみますと、高知県の海面漁業生産額、これは養殖業は除いております。養殖業は除いて、いわゆる海に出て行って魚を捕っていただいて、お金にさせていただくと、その金額は321億円ぐらいになっておりますが、カツオは大体73億円ぐらいを占めております。大体この海面漁業の23%ぐらいの数字をカツオであげていただいておりますので、漁業としても、まさに産業としても非常に重要であるということが見て取れるかと思えます。

そして、このカツオなんですけれども漁業にとどまらず、漁業以外でも本県にとっては非常に重要な魚となっております。一例を挙げますと、これはカツオと本県の観光という関わりです。こちら、大手旅行雑誌、『じゃらん』という雑誌がございますけれども、このじゃらん宿泊旅行調査によります「地元ならではのおいしい食べ物が多かった県のランキン

グ)、こちらのほうで高知県が1回ではなく、たびたび1位になっております。

これは皆様ご承知のとおり、カツオに限らず高知県には、農業もそうですし、畜産、果物、いろんな美味しいものがある。それから先ほどお話がありました、カツオ以外の美味しい魚もたくさんあるんですけども、やはりトップブランドとして誇れるのはこちらにありますような、カツオのタタキ、あるいは、カツオ料理が圧倒的な支持を受けた結果ではないかなというふうに考えております。つまり、昔から関わってきたカツオという魚において漁業はもちろんのこと、観光業においても非常に重要な魚であるということが言えると思います。

ただ、本日お集まりいただいた趣旨にもなってくるんですけども、しかしながら残念なことに、最近どうも県内のカツオ漁に異変が起きているのではないかとということが、今日、これからのお話になっております。後ほどもまた詳しくご紹介しますが、これは沿岸のひき縄という漁業、規模の小さい漁業によります県下のカツオの水揚げ量の年変動を表しているんですけども、一目見てわかりますように、残念ながら非常に減少傾向にあるのではないかと。こういう大事な魚ですが、こういう困った状況になっておりますので、まずは原因を考え、そして対策について考えるということを簡単にご紹介していきたいと思っております。

こういうことを考えるにあたりまして、われわれもつい見落としがちなんですけれども、ちょっと規模が大きくなってしまいうんですが、まずはじめに太平洋におけるカツオの分布と産卵場、こういう図がございます。これが後々も非常に重要になってくるところで、カツオというのは、こちらが太平洋の地図でございます、日本列島がこちらにございます。産卵場があり、分布域があり、漁業が行われているところはこの辺りです。こういう状況になっております。

このようにして見てみますと、カツオというのは実は特徴が、非常に分布が広いということがまず挙げられます。実は太平洋を取り上げておりますけれども、大西洋にもインド洋にもカツオはおります。種類までは変わらないんですが、微妙に系群というのは違うと言われておりますが、非常に広く分布しております。

ただ、この図を見ていただきますとわかりますように、その分布の中心はあくまでも熱帯から亜熱帯域であると。そして、生き物にとって重要な産卵場もこの黄色に、このところになりますので、熱帯から亜熱帯域であると、こういう特徴がございます。そして、カツオからしてみれば、カツオにとってみれば、日本というのはここでございますので、まさに北の果てにあたります。こういうところでわれわれはカツオを捕っている。カツオにとって北の果てで捕っていると。

そして分布の中心や生まれ故郷は熱帯・亜熱帯域にあるわけですから、カツオはここでたくさんいなければ当然やっばり上がってきませんということが容易に想定されます。また、生まれるところというのは主はこちらにありますので、日本でカツオを捕るということは、カツオに上がってきてもらわなければならないわけですが、それがどのようにやっ

てくるのかということが最近詳しくわかってまいりました。

これが最近の調査によりますカツオの推定北上経路という地図でございます。こちらにあるのが先ほど話がありましたけれども、アーカイバルタグという標識になります。これは私の手でございまして、これは昔のアーカイバルタグですので少し大きいんですが、最近はこのタグがだんだん小さくなっています。これは、魚のお腹に埋め込みますと、その魚が遊泳した大まかな位置と場所だけではなくて、水深であるとか、そのときの水温とかいうことを詳細に記録していってくれるという機械です。

この機械を使いまして、やや南のほうで日本の研究機関がカツオの放流調査を行いましたところ、カツオが日本にやってくる道というのは、どうも北上経路として、東シナ海黒潮沿いルート、九州・パラオ海嶺ルート、そして、伊豆・小笠原列島沿いルート、こういう3つぐらいがあるのではないかとということが明らかとなってまいりました。

同時にこのタグ、標識というのは、泳いだ水温がわかりますので、彼らがどう振る舞っていたかということがわかるのですが、どうも……。ここにあるんですけども、例えば、冬とか、春に水温 20 度以下のちょっと冷たい海水の水帯というのがもし形成されますと、そこは避けているということもわかってまいりました。水温 20 度以下の水帯は避けている。冷たい水はカツオにとって障壁、壁になってしまうということもわかっております。

こうしたことから考えますと、わが国周辺での漁というのは、1つ目は熱帯・亜熱帯域、彼らにとってのふるさとでどれだけいるかという資源の水準と、そして、日本、高知県の前に冷たい水があつたら邪魔になってしまいますので、彼らが北上しやすいかどうかという水温等の環境。こういった2つにどうも強く影響されるのではないかとということがわかってまいりました。

さて、このように非常に広く分布して、いくつかの道を通して北上してくる。そのときに、水温が 20 度以下の水があると避けて北上してくるというカツオなんですけれども、では、この北上してくるカツオというのを最近ではどのように漁獲しているのかということを見させていただきます。

こちらが中西部太平洋における国別のカツオの漁獲量の推移でございます。凡例がちょっと小さいですので横にまた国名を書いております。わが国が一番下に表示されておまして、その他が一番上、パプアニューギニア、アメリカ、韓国、台湾、インドネシア、フィリピン等が主要なカツオの漁業国になっているんですけども、一目瞭然、このカツオの漁獲量は急激に増えてきているということが見て取れます。

いつからかといいますと、どうも 1980 年ぐらいから急激に漁業が増えてきていると。これは主に日本の漁獲量というのはそれほど変わっていないんですけども、それ以外の国々、いわゆる熱帯水域での漁場の開発が開始されたあたりから漁獲量の急増期へ移ったのではないかとということが簡単に見て取れます。数字で見ますと、1970 年代 40 万トン台であったものが、1990 年代には 100 万トン前後、2014 年には 199 万トン、直近ですと少し数字は下がっていたかと思うんですが、いずれにせよ 40 万トン台であったものが 200 万トン

ぐらい捕るようになってきている。急激に増えてきているということがこの図からわかります。

次に、問題になってまいりますのが、では、このように急激に増えたカツオ漁というのが一体どういう漁法によって、どうやって捕っているのかということです。こちらのほうを次に見てみますと、こちらが同じく中西部太平洋におけるカツオの漁法別の漁獲量の推移を表しております。青が竿釣、これは先ほども出てまいりました、いわゆる一本釣りと言われるような釣り漁業です。こういうふうにして魚を釣るということです。これはそれほどは変わっておりません。

それに対しまして、赤で示しております、まき網漁業。これはカツオの魚群を見つけますと、非常に大きな網でグルッと回りを取り囲んでざっと水揚げするという、まき網漁業というのがございますけれども、こちらのほうがこのように急激に1980年代以降増加しているということがわかります。黄色には、その他ということが書いてありますが、これは大したことはございません。

1980年代以前を見てみますと、ほとんど竿釣中心と。今日、中田組合長もいらっしゃいますけれども、竿釣というのは全部の群れを釣りきろうとしても釣れるものではございませんが、まき網漁業はどうしても網でザッと捕ってしまいますので、非常に効率がいいということも問題とはなるんですが、こういった形で、かつては竿釣中心であったものが1980年代からまき網が非常に急増しておる状況になってございます。

こういった中で、本県のカツオ漁がどのように変化してきたのかということをお紹介いたします。まず、こちら、本県の沿岸竿釣によるカツオの水揚げ量というのを見てみます。

まず、沿岸竿釣という表現なんですけれども、小さい漁船で本県の沿岸から遠くても薩南周辺辺りかなと、鹿児島県のほうかなと思いますが、そういったところで操業するような、カツオを捕っていただく船がございまして。そういった沿岸のカツオ竿釣船、一本釣り船での年間の水揚げ量を見てみますと、統計が揃っている範囲でこのような推移をたどっております。

どうもちょっといくつか階段状になっているんですけれども、全体として見たときにはやはり減少傾向にあるのではないかと。そして、ここ3年ぐらい、平成25年ごろから特に落ち込んでいるのではないかと。そして、平成15年あたりを境にして、また一つ、レベルが落ちているようにも見受けられます。

この竿釣りの漁獲量なんですけれども、これは年間なんですけれども、では、これを1カ月に直して見てみたというのがこの下のグラフになってまいります。これは、この後も出てくるんですが、どういう見方をするかといいますと、1月から12月まで何月に何トン、カツオを釣りましたかというグラフです。赤の線が平成28年、去年です。青の線が平成27年、一昨年です。そして、ちょっと見にくい緑の線が過去10年の平均です。

このようにして見てみますと、先ほどちょっと旬のお話というのもございましたが、や

はり竿釣りで見てみますと、大きく分けてカツオが捕れるのは、まさにこの4月から6月ぐらいの春の上りカツオの時期、そして、秋の下りカツオの時期ということがあげられるのですが、例えば、過去10年平均に比べまして、ここの山がどうもないんじゃないかということで、上りカツオが減ってこういうことになっているのではないかと。上りカツオでするので、南のほうから上ってきてもらわないといけないんですけども、それが減っているのではないかということが、この2つからわかるわけですけども。

ただし、この間、いろんな社会的な事情等も当然ございまして、船の数も実際に減っております。それから、こういった漁業というのは、規模が小さいとはいえ、ある程度の操業範囲を持たれておりますので、少し遠くへ出掛けていかれることもあります。そういったことから、本県沿岸、土佐湾周辺への来遊状況というのを必ずしも反映していないという場合もありますので、もう1つ、別の見方で同じように見てみます。

それがこの次のグラフになるんですけども、本県のひき縄漁業によるカツオの水揚げ量の推移です。このひき縄漁業というのは、非常に小さい漁船で、日帰りで操業を繰り返しますので、当然ながら本県沿岸での操業しかございませぬので、本県沿岸への来遊状況というがある程度反映しているというふうに思われるのですが、こちらのほうもやはりこういう形で、残念ながら減っている一方であると。

もう少し見てみますと、漁獲量が減少傾向にあるということと、平成15年ごろから減少が、どうも階段を一つ下りてしまったのではないかと。そして、平成25年ごろからひょっとしたらもう一段階段を下りてしまったのではないかとということが考えられます。ただ、こちらのほうの漁業も残念ながらそのほかいろいろな事情もございまして、実際に船の数も減少はしております。だから漁獲量が減るのは当然だという話もあるんですけど、この平成15年ごろからの減少というのは、わが県だけではなくて、他県さんでもたびたび取り上げられていることございまして、例えば、典型的なのは、和歌山県の同じようなひき縄漁業というのがあるんですけど、和歌山県さんのひき縄漁業も高知県と同じような時期から落ち込んでしまって、非常に厳しい状況にあるということが報道等でもたびたび繰り返されております。

この漁業につきまして、同じように月別の水揚げというのを見てやりますと、ひき縄漁業に関しましては、下りカツオの時期もやはりある程度の量はあるんですけど、多くは上りカツオ、3、4、5月なんですけど、こういった山が過去10年平均に比べてドンと下がっているということで、上りカツオが減ったということが残念ながら言えると。

なぜこういうことが起きているのかということなんですけれども、今まで見ていただいた分布とか、あるいはよその国での捕れ方というものを見てみますと、最近になって熱帯・亜熱帯域での大量の漁獲というものがあって、熱帯・亜熱帯域での資源が残念ながら減少してしまって、結果、北の果てである本県沿岸への来遊の減少を招いているのではないだろうかと考えざるを得ないというふうに思っているところでございます。

これは一番最初に見ていただいた図です。カツオが太平洋に広く分布している図なんで

すけれども、分布が広く、中心は熱帯から亜熱帯、産卵場もそこ、日本はカツオにとっての北の果てなんです。これはカツオに限ってということではなくて、一般に生物の分布は……。すいません。突然ちょっと説明的になるんですが、生物の分布は資源量とともに縮小したり、分布の縁辺部で資源の豊度が減少するということが言われております。

つまり、資源……。カツオにとってのふるさとのこういうところでの多い少ないというものが、少なくなってしまうと、数が減るだけじゃなくて分布が縮まると。分布が縮まると、一番端の日本は影響を受ける。要は、これが縮まってしまうわけです。あるいは、分布の縁辺部、まさに日本ですけれども、そういったところはこういうところの影響を強く受けて増えたり、減ったり影響を受けてしまいますよということがカツオ以外の生き物でも言われてはおります。

そうしたことから、あるいは先に見ていただいたような急速に漁獲が伸びていってるような状況を見ても、熱帯・亜熱帯域での資源の状態というものが縁辺部であるわが国周辺へのカツオの来遊に大きく影響しているのではないかとこのように考えられるということが今現状でございます。

こういったことを受けまして、わが県の対応なんですけれども、こちらのほう、ちょっと字が細かくなってしまうので、お手元の資料のほうを見ていただいたほうがいいかなと思うのですが。左の上には、今現在、今まで述べてきたような状況。特に平成 15 年ごろからカツオが落ち込んでいて、それは、熱帯・亜熱帯域での大量漁獲により資源が減少し、本県沿岸への来遊が減っているのではないかとこのことを考えまして、県としましては、早くから危機感を持っておりまして、国に対して平成 16 年から政策提言を続けて行っております。

特に近年は、これは先ほどもお話ありましたが、カツオというのは非常に広い範囲に分布する魚ですので、わが国だけではどうしようもなく、カツオ資源を管轄するのは、この WCPFC という団体がございまして。こちら、中西部太平洋における高度回遊性魚種の長期的な保存及び持続的な利用の確保を目的として設立された、24 カ国プラス EU、台湾で構成されております。マグロ、カツオ類などの資源の科学的な評価や資源管理措置の構築等を行っているのが、この中西部太平洋まぐろ類委員会、略して WCPFC という団体がございまして。こちらのほうがいわば大本になりますので、県としましては、この中西部太平洋まぐろ類委員会において有効な管理措置がとられるよう働きかけることに重点を置いて政策提言を行っております。

その結果、平成 26 年には、カツオについて進展がございまして、それまで問題ないとされてきたカツオ資源に関する評価において、資源は減少傾向にあり、赤道域における高い漁獲圧が高緯度水域、日本ですね、日本等への回遊を減少させている可能性について言及。逆に言うと、これまでは WCPFC は、カツオはこの辺りでいくらかでも捕れるものですから資源的には問題がありませんという一点張りだったわけです。その認識が少し変わってきたということが平成 26 年にございました。

さらに、平成 27 年には、カツオ資源に関する長期管理目標というのが初めて合意されております。この長期管理目標、これを目指しましょうという数字なんですけども、これは現在、初期資源量の 48%まで減少したと考えられるカツオ資源を 50%まで回復させること。

これは、耳慣れない言葉かと思うんですが、初期資源量というのは一番下に書いております。ちょっと馴染みがないと思うんですが。資源というのは魚が捕れた量ではなくて、魚が泳いでいる量です。その魚が泳いでいる量を計算するんですが、そのときに仮に漁業がなかったと仮定した場合、まったく魚を捕らなかったと仮定した場合の資源量というのを初期資源量と言います。それに対して漁業によってどれくらい減ったのかということを考えてりするんですが、今現在カツオは漁業がなかったと仮定したときの 48%ぐらいではないかと言われております。それをまずは 50%まで回復させるということで、長期管理目標が平成 27 年に初めて合意されました。

しかしながら、この長期管理目標というのは、実は不十分でございまして、これは交渉にあたっておられる水産庁さんもまったく同じ認識でいらっしゃるんですけども。しかし、わが国周辺への来遊の回復が見込める水準はこの初期資源量の 60%であるというふうに言われております。したがって、長期管理目標は、このいったん 27 年に決められたときに、遅くとも平成 31 年までに見直されるということになっておりますので、見直しにあたっては、その管理目標の 60%までの引き上げが必要ではないかとわれわれも考えて、政策提言を行っているところです。

なぜ 60%なのか。50%ではいけないのかと言いますと、こちらが県下の先ほども見ていただきましたひき縄の水揚げ量なんですけれども、この初期資源量の何%、何%も目安だと思っていただければいいんですが、この初期資源量に対する何%という数字が、このわが県で漁獲がどうも減ってきた、そして、他県さんでも同じように減ってきたと考えられる平成 15 年あたり、このあたりでどうも 60%を下回ってしまったということが、今、計算の結果わかってきております。つまり、この水準、元的水準に戻していただくためには、初期資源量というのがこの落ち込みの手前、前の段階に戻してやらなければいけないんですが、これ以前の水準というのが 60%にあたるということで、こういう主張を行っているところです。

こちらもちょうと字が小さくなって恐縮なんですけれども、県のホームページでも見ていただくことができます。これは実際の政策提言の紙そのものを用意してまいりました。県の政策企画課だったかのホームページに載せられてございますけれど、これがわが県の昨年の政策提言でございます。

こちらのグラフ、見ていただきますと、これは形は違いますが、赤がまき網による漁獲量、青が竿釣りによる漁獲量です。中西部太平洋の漁獲量が主にまき網さんを中心とずっと伸びていっている中で、ここで取り上げておりますのは、本県の近海カツオ一本釣り、これはカツオの群れを追い求めてかなり遠いところまで、小笠原へも行かれますし、東北へも行きますという、カツオの群れと一緒にずっと動いて行かれるカツオ一本釣りの漁獲

量が反対に落ち込んでいってると。こういったことに関して、何とか考えていただきたいということを働きかけるという政策提言をずっと行ってきておりまして、今年も知事自ら、去年もでしたか、知事自ら政策提言を行っているところでございます。

それでは、私の話のほうは以上でございます。ご清聴どうもありがとうございました。

○岡内（株式会社丸三 代表取締役会長）

続いて、竹内さん、お願いします。

それでは、竹内さんにお話をいただく前に、自民党の水産部会長の中西国會議員にお越しをいただいておりますので、ご紹介申し上げます。

○中西（衆議院議員）

おめでとうございます。

○岡内（株式会社丸三 代表取締役会長）

ありがとうございました。また、後ほど、懇親会の冒頭ぐらいにご挨拶をいただきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

少しまだ時間がかかるやに思っておりますので、今までのご説明の中で少し補足をしておいたらいい件がありますので、ちょっとお話を申し上げます。

規約の施行日は本日の2月9日からで、準備も含め、実質的な活動は本日からスタートをいたしますが、分科会の活動計画などは、今後具体的に検討してまいりますので、本格的なスタートは4月10日のシンポジウムの日というように考えております。

あと、県民会議に会費を払えば広く県民が委員として参加できますかというご疑問を持たれると思いますが、委員さんについては、今後、企業、団体を中心にさらに参加を促していくことを考えております。広く一般の県民の皆さんということで言えば、シンポジウムなど、具体的な取り組みにご参加をいただくほか、趣旨に賛同いただける方に、賛助金をご負担いただくことで検討しております。ですから、会費ということではなくて、1,000円の賛助金ということで、シンポジウムやそういう形のものにご参加をいただく。そうした場合、県民会議の活動内容をニュースレターなどでお知らせをするということで情報の共有を図りたいというふうに考えております。

じゃあ、竹内さん、準備整いましたでしょうか。

○竹内（株式会社加寿翁コーポレーション 代表取締役社長）

お待たせしました。ちょっと準備に時間がかかりましたが。司の竹内です。先ほど水産振興部の方からお話がありました。私は商売人というか、経済人ですので、もう少しざっくりとしたお話を。日本近海のカツオと、それから海外、主に先ほどお話に出た WCPFC と

いう、中西部太平洋地域のマグロ、カツオの資源の問題をお話をさせていただきます。

まず、こちらがカツオの1983年の水揚げ高です。これが30年後の水揚げ高、303万トン。特に日本に関係ある中西部太平洋地域、こちらは63万トンから191万トンになって、約130万トン、この30年で圧倒的にほかの海域よりもカツオを捕っているという状況が見て取れます。

これをグラフにすると圧倒的ですね。ここ191万トン、あと、東部太平洋地域、インド洋、こういうふうにありますけれど、ここで急激に増えたと。では、そういう理由は何かということになります。これ、この前のカツオフォーラム、気仙沼でやったときの一つの資料なんですけれど、簡単に言いますと、この30年間に西部太平洋地域で、63万トンが191万トンになったということは、どうしてかということですね。どなたかもおっしゃいましたけれど、要は、今までは日本の生食用に捕ってたものが違うマーケット、巨大なマーケットができた。巨大なマーケットとは何かと言ったら缶詰です。ツナ缶。ツナ缶をEU、それから、アメリカに送る。もしくは、その以前はペットフードでした。ペットフードをEUとUSAに売るためのまき網が増えてきて、1980年の後半くらいからですかね。その後、ますますそれが今度はツナ缶になることによって売れるようになった。ウォルマートとか、カルフルを中心一気に広がっていった。だから、日本以外あまり、インドネシアの一本釣りとか、パラオ、ほかの東諸国の釣りの漁業はあったんですが、いきなり資本としてカツオの船を造るファウンドの方も現れて、急激に船も増えていったということで、マーケットができたということです。カツオまき網にとって小型の魚、生食用じゃなくても、というやつがです。

これも図示しますと、これが太平洋地域で捕れたカツオの量です。それがタイに行くんです。タイにタイ・ユニオンという世界で一番大きな水産会社があります。これ、華僑が経営していますけど。そこで缶詰にしてEUとUSAに行くという流れがこの30年でできています。そのために、この海域の漁獲高が急激に増えてきたと。これ、191万トン。こちらでいきますと、タイで576千トン、ツナ缶にして輸出しているということは、これ、歩留まりじゃない、缶詰の重さですから、歩留まりの原魚換算したら倍ですね。120万トンぐらいタイに集まっていると。まき網の冷凍の、生食用じゃなくて缶詰用のカツオが。だから小さいカツオでもいいということですね。だから日本以外のところは、このまき網で十分ビジネスをしているということでもあります。

それからこのグラフも、先ほど高知県の方もお話が出たかもしれませんが、この黄色いほうが一本釣りの漁です。こちらがまき網です。これ、国内の水揚げです。

これが2008年ごろは、約4万5千トン。その以前は大体5万トンが一つの釣りのカツオ船の基準だったんですが、だんだん、だんだん減ってきて、受田先生がカツオフォーラムを始められたときに、本当に史上最悪の不漁だという話が出たのがこのときです。このときは3万トンを切りました。少し復活したんですが、2014年からまた急激に3万トンを前後するような一本釣りの漁になっていると。ところがまき網も減ってるんですね、近海の

まき網も。だから日本の資源量全体が減ってる可能性は十分考えられる。

つまり、先ほどお話が出た中部大西洋地域からの来遊量が減ると。もとを押さえられてるということですね。黒笹さんがおっしゃったように、高知だけで解決できる問題じゃないと言え言えるんです。ただ、けど、それをどうするかというのをちょっとご提案を申し上げます。

これも同じようですね。釣りの推移です。3万7千トン、こういうふうになっています。まき網は減っています。国内のカツオのまき網船の水揚げは。

これが一番直近です。これも3万トンです。やっぱり前までの、私が一番最初カツオをシジレタ初めの日本全体の釣りが、カツオの釣り船は大体5万がトータルの基準でした。

これは高知県の水産振興部の方にいただいた、この水揚げの量です。釣りとはひき縄の推移がこれですね。これが一昨年。726トン。2011年が1,500トン。もっと前はもっと多いんです。極端に減ってきてますね。来遊量と、これは、沿岸の船です。

これは去年の速報ですけど、これも釣りとまき網、トータルでは2割減と。2016年、去年の12月の速報ですね。

カツオは難しいんです。私、実は2013年から東京で海洋資源……、日本の水産資源が危ないというのを肌で感じまして、NGOを作りました。そのときはクロマグロの問題、サバ、それからアジ、大量に群れで動く魚のまき網でやるのを資源管理するべきだということをやりましたが、どうしてもカツオのことが心配になりまして、この3年間、そういうNGOをやったお陰で、海外にも、いろんな情報が入るようになりました。

そこからカツオの問題は難しいけど切り口があるんじゃないかと。だって、産卵地域が赤道のほうにあって、そこから上がってくる前に大量のまき網船が捕ってるという状況が続いていますので、高知県だけでそれがストップできるかといったら、普通はできないですね。ただ、黙って見てていいのかということも思っております。

それで、その一つのヒントになるのがインド洋のマグロ類研究……、これもWCPFCのインド版なんですけど、そのカツオ資源の危機というのがやっぱり、これを先手を打ったんですね。それは、モルディブという国が一本釣り漁業をやってるんですけど、ここがIOTC、インド洋マグロ・カツオ委員会の国々を巻き込んでこのままだったらカツオが減ると。だからそれを、資源管理を、国を越えてやろうという提案をしたところですね……。こっちで見たほうがわかりやすいかもしれませんね。

モルディブがハーベストコントロールルール(HCR)と言うんですけど、日本では、Total Allowable Catchって、同じ漁獲制限、それを国別で割り当てるということを決めたんです。採択したのが去年です。本当はWCPFC、西部太平洋地域でもそういうのを本当は日本の水産庁が先頭切ってやっておけば、こんなことはならなかったと。別に水産庁を責めたくはないんですけど、そういう落ち度が見られると。だから先ほどの県庁の方とちょっと見る角度が違うというところが私はあってですね、もうちょっと水産庁、頑張ってもらいたい。

インド洋のカツオ資源は今でも比較的良好です。先ほどお話が出たように、初期資源量、

今 57%。中西部太平洋地域は 48%です。インド洋……、この時点でもう資源管理やろうと
いうことのコンセンサスができたということでもあります。

それで、先ほど言ったモルディブ……。モルディブ多分、高知かそこら、GDP から言うと
高知並みじゃないですかね。もっと高知より低いかもしれない。そこが根回しをしたんで
すね、ほかの国に。それによって、それからこの国だけではいけないからやっぱり国際的
な NGO がいっぱいあります。資源管理をする。例えば、パッカーズ財団とか、ロックフェ
ラー財団、そういうところが結構われわれにもいろいろ協力してくれるんですけど、
そういうこととも連携をしていったというような動きをして、そういうさっき言った資源
管理を国別にやろうという動きが去年に決まりました。

われわれ売人というか、ビジネスをやっていると、じゃあ、どうするの？ということと
ですよね。客観的事実がありながらどこに可能性をかけるかということを考えて、ご提案
をさせていただいたわけなんですけれど。

これも先ほどの県庁の方の資料にあったように、ダントツですね。1人あたりのカツオ
消費量。ここで面白いのは、福島、水戸、仙台、盛岡、東北の県ってカツオ食べるんです。
やっぱり気仙沼があるから気仙沼に揚がってくるんです。それ、美味しいです。戻りカツ
オの生を食べる。ということは、これはこの指標、大事なんで、東北の県と次の段階では
リンクしていこうと、協力していこうと、カツオ資源の問題を。高知で旗をあげると。そ
れにやっぱり協力してくれる県は、宮崎とか、あとちょっと漁法が違うんですけど和歌山、
それから千葉、それから気仙、このへんともリンクできる。好きで食べる県のほうがわか
るんですね、カツオの危機が。そういう意味でダントツに高知で旗をあげるべきじゃない
かなというふうに私は思って、受田先生とか、岡内さんにご相談をいたしました。

それで、日本にカツオを取り戻すと。やっぱり高知県でバラバラに……。前はカツオフ
ォーラムで漁業者の方、今日も中田会長がお見えになってますけど、そういう方。それか
ら中土佐町の池田町長、黒潮町の町長さんと集まって勉強会をやったり、やりましたけ
ど、やっぱりここまで来たら高知が一丸とならんと向こうへつながらんと。海外にです
ね。海外が、戦場がもう海外ですから。それで、そのためには、やっぱり主観者になら
んといかんと。県民そのものがですね、なって具体的な行動を起こすと。高知県は知事、
国会議員、マスコミ、経済、これが一丸となると。量販店もそうですね。当然漁業者の方
もそうですね。そうじゃないと絶対に届かんとお思います。

高知から旗をあげると。今日がその日かもしれません。それで、オール高知で、それ
から先ほど申し上げた、カツオが好きな県と組む。もしくは、一本釣りをやっているところ
と。で、共通の情報発信をしていくと。そういうふうに横の連携をとるということですね。
これは先ほどもちょっと岡内さんから……。こういうことをやっていこうというふうな
ことです。

一つ、短期的に考えると、カツオの EZ 内 で一本釣り以外にもまき網船と、あと海巻き船
があります。海外まき網船、これ、大きな船ですけど、普段は中西部太平洋地域で大型ま

き網船の、日本の船ですけど、そこが捕ってるんですけど、6月から8月だけ、パヤオ、パヤオというのは魚礁……、魚礁でやってはいけない禁漁期間があるんです。そのときだけ、大きなまき網船があがってくるんです、日本の一本釣りの漁師のエリアに。そういうこともやっぱりある程度、漁獲規制をすると変わる部分もあるかなと。

ただ、基本はWCPFC、中西部太平洋地域でもとの問題をやらなくちゃいけないんですけど、こういうものもカツオ会議ができたことによって、俎上にあげれるんじゃないかというふうに考えています。

漁師さん同士がやると、やっぱり大きいところは強いんですよ、まき網とか。まき網の会社が大きいところが多いですから。一本釣りの漁師さんはやっぱり一人一人が戦ってるから弱いですね、そういうやった場合。相手が、組織が大きい。だからそれではいけないからどうするかということですよ。

先ほど申し上げたように主戦場は海外にあります。黒笹さんがおっしゃるとおりで、高知から届くものじゃないんです。だから最終的には政府が主導して国際交渉をせないかんんです。関係省庁、水産庁ですね、政治家の方に頑張っていただきたいと。WCPFCの中で国別の漁獲枠、さっき言ったハーベストコントロールルールを作れるかどうかですね。それからインド洋マグロ類委員会に学ぶと。それから国際会議、WCPFC、年に2回あります。それにわれわれの先ほど申し上げた NGO の仲間も今派遣して、そこから報告があります。

それから、それで思ったのは、水産庁の発表と違う。日本はボコボコにされたんです、実は。その話もちよっとしますけど。次回、県民会議のときに水産庁の人が講演に来るようですのであまりそんなことは言いたくはないんですが、そういう部分もあるからすべてを鵜呑みにすると、これでいいんだと思いますが、そうじゃないというふうに私は考えています。

それから、もう一つ変えるとすれば、WCPFC が本丸ですけど、あとマーケットの側面。先ほど申し上げた EU とか USA、ツナ缶の消費国に、ウォルマート、カルフルに資源、乱獲状態のカツオを売ってるというふうに、消費者団体とか、NGO が今訴えてるんですね。そうすると、彼らを買うのを減らしてるんです。それによってタイ・ユニオン・グループはそうしたらどうするかという対策に今迫られています。こういう攻め方もあるんです。

こういう攻め方にして消費の観点から、例えば、ウォルマートとか、カルフルの CSR にプレッシャーをかける。そういうやり方もあります。これはつまりタイに乱獲させないカツオを揚げるというにはどうするかですね。そのためには、こういう NGO との連携。たまたま私は 2013 年からそういう NGO との付き合いができてますので、そういうところとの連携ができないことはないなと。

それから日本の大手のメーカーさんで、こういう味の素さんとかもやっぱりカツオを仕入れていますから、その買い方なんかも聞いてみる価値はあると思いますね。彼らもそういうことを、今まで仕入れ値が安いから買ってたということで、意識が変わってもいい時期じゃない。もしそうであればですよ。味の素さんがそういう買い方をしているとは言い

ません。だから、そういう部分も考えていくと。

それで、実は一つのトレードオフと言いますか、矛盾があります。WCPFC で日本がカツオの問題を、今、資源量が 48%を 50%にしようと。それから最後は 60%にして欲しいというのを、WCPFC で確かに書いています、そうやって言ったと。

実は、一番直近の WCPFC では、WCPFC 加盟国のほかの国は、日本は資源量 48%のカツオのことを言うけど、日本が産卵地域であるクロマグロに関しては 2.6 しかオヤウオ(親魚?)資源量がないんです。それを言って、こっちは 48 を 60 にしろというのはおかしいんじゃないかと言われてるんです。

で、日本は 2034 年にマグロの資源量を 20%にしろということも言われているんです。だからカツオ、マグロ委員会なんです。だからこっちは確かに水産庁が言ってるとおりになんです。これを 60 にしたらわれわれもううれしい。ただ、委員は同じですからね。こっちどうするの?という話は全然日本では今進んでないです。資源量がオヤウオ(親魚?)、初期資源の 2.6 というのは絶滅危惧種です。産卵地域は日本にあります。カツオと逆なんです。カツオは赤道直下から、われわれは被害者ですね、極端な言い方すると。こっちはその逆という見方を WCPFC から見られる。それから、EC 諸国からもそういうふうに使われているというのが現状です。その中でどうするかですね。

ということを皆さんのお知恵を借りながら、やっぱり何とか高知が旗をあげることによってほかの地域の人にもカツオの危機を感じてもらう。それを感じてもらったことで、より日本的な運動になればと思っています。高知県しかカツオのことは救えないんじゃないかなど。何もしなかったらおそらく減りますね。間違いなく減ると思います。もし旗をあげるんだったら全国で高知県しかないと思います。

例えば、変な話、宮崎県が旗をあげても……。水揚げ量は宮崎のほうが今多いんです。船の性能が良くてそっちにいます。けど、やっぱり日本人のイメージは高知ですから、単なる水揚げだけじゃなくて、観光にも高知県のを支えてる。それから、何よりも水産業というのは、加工業がそこに安定して魚が入ると育つんです。だから漁業者の数は減るかもしれない、効率化によって。けど、資源管理をちゃんとできるような状態をつくれば、安定して魚が入ると。そこで加工業が栄えて、地域の雇用が生まれるという流れが漁業の資源管理の先進国の今、成功事例がいくつもあります。

ちょっとカツオの話から外れましたけれど、だからやっぱり高知県の県民が主観者となってやったらどうかなというご提案を岡内さんと受田先生にさせていただいて。もしやらないでも私はやるつもりですけどね。それでダメならもう仕方がないかなということは感じてます。だから、ほかの美味しい魚、高知にいっぱいあります。いっぱいあるけどやっぱりカツオにとんがってみてもいいかなというふうに考えております。

これ、最後になりますけれど、これは去年、一昨年ですか、中土佐町でカツオフォーラムをやったときの宮原さんという水産庁の前の次長がおっしゃったことを高知新聞から読んで入れたんですが、これ、同じですね。WCPFC の加盟国の仲間作り。それから科学的な強

化。これ、マーケットを利用して資源管理をする。例えば、高知ならサニーマートさんとか、今日来てるからわざとと言うんですけど、あたりがそういう売り方をしてみたらどうか。けど、それを何に絞っていくとかかですね。やっぱりそれは多分、県民の人も「私も協力したい」といって、一番できるのは消費の行動だと思います。そういうものは何かとかいうのをこの会議でも議論ができたらいいなというふうに思っております。

ちょっとこれからどうしていくかというのは、やっぱりこれから皆さん集まってお知恵を借りてやっていかないと、本当にカツオは減っていくと思いますし、やっぱり高知県の県魚として、せつかく今日、産官学、マスコミの方も含めて一丸となってお集まりいただいておりますので、ぜひお知恵を貸していただければと思っております。どうもすみません。ありがとうございました。

○岡内（株式会社丸三 代表取締役会長）

はい。ありがとうございました。

皆さん方からご意見やご質問をちょうだいしたいと思います、2点だけ、少しご報告をさらにさせていただきたいと思っております。

いつまでこのカツオ県民会議を続けていくのかというのが多少疑問としてお持ちになると思いますが、終わる時期というのは、特定、定めてないわけでありましてけれども。カツオの資源回復に向けて、関係国との国際協議が進まなければ事は成らないわけでありましてから、すぐに大きな前進が見えてこない可能性もあります。現時点では、2年後に本県で開催される「豊かな海づくり大会」の趣旨も活かしながら、そのことを一つの節目として気運を高めて進めてまいりたいというふうに考えております。永続的にある意味で進めていく事柄でもありますけれども、一応の目安は、一つは「海づくり大会」というところに置いているということでもあります。

あと、県民会議という民が起こしたのに関して知事が会長をしていただけるということではありますが、本県にとって最も重要な資源であって、漁業者の方のみならず本県では食文化の形をつくり、観光面でも高知を代表する素材ということで、その回復を目指すことは、広く県民の皆さん方の利益に即するというお考えのもとで、会長職をお受けをいただきました。本当にそういう意味では異例なことではございますけれども、高知県の県魚であり、皆様とともに高知県のあるべき明日をつくっていける一助になるということでお受けいただきましたことを、ご報告を申し上げたいと思っております。

それでは、ご意見、ご質問ございましたら。

○吉村（株式会社青柳プロダクション 取締役社長）

はい。青柳プロダクション、吉村領です。こんにちは。知っている方もいると思いますが、「土佐の一本釣り」というマンガを書いた青柳裕介という漫画家の息子です。そういう立場でここに来ています。

難しい話とかたくさん先ほど聞かせてもらって、いろいろ理解するところです。単純にまとめたらひょっとして、大きくなる前にカツオを捕られるき、いかんという話ですかね、これは。生食に耐えうる大きさのカツオを小さいうちにたくさん捕られるから、捕れるところまでカツオがこんぜよという話ですかね。その前に捕られんように、いろんな理屈をつけて止めてしまおうという話ですよ。減っちゅうき、減らしたらいかんぜよというやり方もあれば、そんなん商売にならんきやめちよこうぜという止め方もあれば、とにかく自分らあの口に、カツオのタタキなり、刺身なりが入る状況を確保しよう、残そうという話ですよ。そうですよね。単純にすれば。

○岡内（株式会社丸三 代表取締役会長）

ええ。それから先のちょっとご意見も言っていて。

○吉村（株式会社青柳プロダクション 取締役社長）

で、難しいことはお任せしますので、ロマン的なところを。大きなカツオを世界中が食べられるようにする、ですかね。高知の食べ方を世界中に伝承する。そしたら、加工食で潤っているタイも、いや、大きいカツオのほうが、刺身で食うたほうが美味しいやんかと子どもらが思ったり、大人らあが思うと、それはうんと捕る前に大きくなるまで待とうよ、美味しい刺身を食べようよ、というニーズを世界中に伝承して、高知流の食べ方を世界中に伝えていって、そういう食べ方を世界の基準にすれば、大きなカツオを捕ろう、大きなカツオになるまで待とうという空気が生まれるんじゃないでしょうか。という、ロマン的な意見でした。

○岡内（株式会社丸三 代表取締役会長）

はい。ありがとうございます。

出発点の、大きくなる前に一網打尽という話ですけど、どうもそれらしいというのが現状で言える話でして、それを学術的に完全に証明されるのは、例えば、アーカイバルタグをカツオにつけて完全な調査ができてきて、そういうデータがあがってきて初めてそのとおりだということになるわけです。ですから、そこも、ちょっと歯に衣を着せたような、ちょっと歯がゆいところもありながら、なるだけそうでないところへ持っていくというのが、多分、国際政治の世界の話ではないかというふうに思いますので。

出発点もそうですし、それから、大きくなるまで待とうという、その食に対する認識を、世界を変えるということも大変難しい話でしょうから、私どもとしては、マンガの世界も含めて、県民運動としてのカツオを日本に取り戻すという文字通りのことを大きく進めていきたいというふうに現時点では考えているということでご理解を賜りたいと思います。

○近藤（高知県水産振興部 副部長）

若干、補足をさせていただきたいと思います。高知県の水産振興部の副部長の近藤と申します。

おっしゃるとおり南のほうで巻いて捕るから北上しないんだと。それは基本的にその通りだと県は思っております、水産庁も基本的にそういうふうに認識していただいております。ただ、国際的な場で説得力のある主張をしていくために、その科学的なデータというのはどうしても要るということで、私どもも水産試験場なりで収集してきたデータをなるべく正確に提供して、国の交渉力を高めていただくようなご支援をさせていただいております。

その中で、今、水産庁からお聞きしている範囲では、カツオの資源量を計算するときに、特定の海域から移動しないというような前提で計算がされていたり、その資源の認識方法自体が必ずしも統一的に、水産庁が言うような形で理解をされていないというようなこともあるようにお聞きしています。したがって、可能な限り各県が提供できるデータは提供して、国際的な協議を強く進めていただけるようにバックアップもしてまいりますので、おっしゃるとおり、南で巻くのが原因だと県も思っておりますし、水産庁も思っておりますので、ご趣旨も含めてできることは検討させていただきたいと思います。

○岡内（株式会社丸三 代表取締役会長）

そのほかにご意見、ご質問ございましたら。はい。どうぞ。

○西野（共同通信社高知支局 支局長）

私は共同通信社の支局長をしております西野と申します。

竹内社長、非常に面白いお話を聞かせていただき、ありがとうございました。それから水産部の方々のお話も非常に興味深かったんですけども。あと、資料を見ると、過去カツオ学会がいろんなシンポジウムを開いて資料を出したりしています。そのような資料、あるいはデータのようなものが、ちゃんとアーカイブされて、この会議を進めていくうえで必要であればちゃんとアクセスできるような体制を、県なり、高知大なりのほうで検討していただければありがたいと思います。

というのは、例えば、竹内社長のレポートの中でも、その表になっているのは原資料は一体どこなのかとか、報道側としても使いたいときに、どのような裏付けを取ればいいのかとかいうふうな課題が生じてくると思うんですね。いちいち社長に電話して、ああだ、こうだ聞いていても、その前にちゃんともとの資料があり、そこから考え始めていくというふうなことができることが大事なのではないかというふうに思っています。ぜひ可能かどうか。それからどれぐらいの範囲でそれを共有するのかというふうなことをご検討いただければというふうに思います。

それから、何年やるのかという話もありましたけれども、一つの考え方として、カツオハンドブックのようなものがこの会議の成果としてまとめられるのがあるのではないかと

思います。いろんな知見が、集めていくわけですから。高知新聞さんは当然連載企画もやるとは思いますけれども、そういうふうな中でどういった議論があったのかとか、カツオのことを考えるうえではこれを見ればわかるというふうなものができるればいいのではないかと考えます。これは提案です。

○岡内（株式会社丸三 代表取締役会長）

はい。ありがとうございます。

今、お話があった、一つのホームページで完全にアクセスできるということは、既に準備委員会で議論をしておりまして、カツオ学会のホームページを使わせていただくような仕組みが組めないかなということ。カツオ学会も受田先生が副会長をされていますので、そんな話をしておりますので、多分、近々鮮明にそういうことができると思います。

もう一つ、カツオのハンドブックについてですけど、こうした運動のハンドブックもすることながら、NPO の高知の食を考える会で、今日、池澤さんがお見えになってますけど、県民がもっと本当の意味でカツオのうんちくを語れるようなことが必要だということで、県民向けの小冊子のうんちく本を作ろうとかいうようなことも具体的に、それはネットのほうへ上げていますけれども、活動してますので、全体としてのハンドブックというような、今、ご指示をいただいたところへは向かっていけるというふうに思っています。

○竹内（株式会社加寿翁コーポレーション 代表取締役社長）

あと、おっしゃってましたデータの裏付けと。例えば、今日のやつは、基本的には水産庁のデータです。ホームページから拾う、もしくは、水産庁の人に直接話を聞いてデータをもった分ですけど。確におっしゃるとおり、これからのデータの裏付けうんぬんというのは、しょっちゅう変わっていくと、どういうふうにするかというのは、ちょっとこれからわれわれも考えなくちゃいけない問題ではあります。

今日に関しては、水産庁と「みなと新聞」という、水産関係の業界紙のデータを使いました。

○岡内（株式会社丸三 代表取締役会長）

はい。ありがとうございます。

それでは、そのほかにご意見、ご質問ございましたら。

○池田（中土佐町 町長）

これ、何時までやるがです？

○岡内（株式会社丸三 代表取締役会長）

一応、5時までの予定ですけど。

○池田（中土佐町 町長）

まあほんなら。いや、一言ばあ、言わないかんけど、もうちょっと皆さんが言ってからと思って。

○岡内（株式会社丸三 代表取締役会長）

いいですよ。どうぞ。

○池田（中土佐町 町長）

いやいや。あとで、あとで、あとで。

○岡内（株式会社丸三 代表取締役会長）

いかがですか。

○横山（土佐御苑）

よかったらさっきのカツオうんちくの、池澤さんにちょっと説明してもらったら。

○岡内（株式会社丸三 代表取締役会長）

いいですか。池澤さん。

○池澤（高知中央市場鮮魚買売人協同 理事長）

はい。上町で魚屋をやっております、池澤と申します。今日、高知新聞さんのほうにも掲載されたんですけど、『かつおうんちく辞典』というのを、「高知の食を考える会」の委員会の中で作りました。もうホームページはアップしております。

どういうものかと言うと、高知人がカツオのことを知るためのページというものになります。県外人とか、観光客向けのパンフレットとかは結構いっぱいあるんですけど、高知人自体があまりカツオのことを知らないということが結構魚屋の現場にいてそう感じています。旬がいつかというのをまず知らないし、タタキぐらいしか食べ方知らんとか、すごくそういうのが多いというのを感じていまして。まず、高知人がそういうカツオに対するうんちくを身につけて、それを県外の人に来たときに高知人の口から伝えるということで、それが一つの観光資源にもなるかなというふうに考えています。

それができるのは、ほかにいっぱい産地はありますけど、ここまでカツオを食べる高知人にしかできないことではないかというふうに考えていまして、それでうんちくというのをまず高知人が身につけるという意味で、高知人のためのカツオのうんちく辞典というのを作ったところです。以上です。

○岡内（株式会社丸三 代表取締役会長）

はい。ありがとうございます。

じゃあ、池田副会長、どうぞ。

○池田（中土佐町 町長）

皆さん、こんにちは。中土佐町長の池田でございます。私、実は板前でありまして、町長という立場にありますが、実は、法善寺横町ですね。町長クビになったら、来年の選挙があるんですが、もう包丁一本持って回ろうかといった人間であります。

全国各地に高知県人会というのがありまして、高知県人会の総会がいろんなところであります。一番でかいのは、関東高知県人会、今年の11月にありましたが、650人ぐらいお見えになるわけです。もちろん、竹内太一さんは私の学校の先輩でして、大変ご指導を仰いでおるんですが。

とにかくカツオを食べたいと。やっぱり高知県に縁のある人はみんな思ってるんですね。私が行ってカツオを切るんですよ。例えば、東京では東武レバントホテル（東武ホテルレバント東京？）で毎年やるんですが、椿山荘でもやってきましたし、それから、京都のウェスティン都とか、大阪のペイタワールとか、新阪急とか、あるいは神戸とか、それから四国だったら高松のホテルクレメント、まあ、そんなところで200人、300人とかいうお客さんにカツオを切っています。

本当につくづく思うのは、皆さん、カツオを待ってるんですよ。東京だったら築地があるじゃないかと言われるけれども、中土佐町の生のカツオをスラリーアイスという特殊なマイナス1度の氷で、生のまま冷凍せずに送って、それを切って食べてもらいます。

まさに今、池澤さんが言われた、カツオって高知県民もそうなんですが、当然、全国の方なんてうまいカツオを食べたことないんですよ。スーパーで買ってきて、魚屋で買ってきて、これ、なぜという世界でありまして。私は何とか、カツオの一本釣りの町という、それを標榜しておりますので、「鯉乃國の物語」ということで、皆さん、お越しになっていただいておりますけれども、例えば、黒潮本陣とか、カツオということで売っております。大正町市場もありますし、カツオを食べるやったらひろめもあるけど、高知じゃやっぱり久礼ぜよということもございます。とにかく美味しいカツオを食べてもらいたい。

そのことによって全国民にカツオの素晴らしさというのをわかっていただけるんじゃないかと思うんですが。今、いろんな資料が出てきました。本当に捕れないということは、カツオの単価が高くなります。冷凍は別です。生の一本釣りのカツオだったら、例えば関東高知県人会のときには、一本のカツオ、20,000円ですよ。キロ3,000円のカツオを原価割れで持って行って、切ってやります。しかし、これも私はカツオの漁師が今まで体を張ってやってきた町の使命であると。本当にうまいカツオを食べてもらいたいという思いでそういうことをやっておるわけでありまして、池澤さんに、まず、高知県民に本当のうま

いカツオを……。ゴシのカツオを平気で魚屋が売りゆうところがあります。それ食べて、どうも生臭いき嫌いじゃと、こういうわけです。美味しいカツオを食べたことないんですね。本当に美味しいカツオ。

最近、塩タタキというのがありますけど、われわれ、カツオの漁師がいる地元でいうと、冷たいカツオに塩振ってなんでうまいぜよと。やっぱりぬくぬくの、熱々の焼きたてのカツオに塩が振ってあって、それを食べるし美味しいわけです。

俵万智さんが中土佐町に以前来られて、初めて塩タタキを食べた。感動して、アチアチ (熱々?) のタタキということで、彼女が本に載せられましたけれども。それと、あと坂本龍一さん。彼が黒潮本陣に泊まって、私がカツオを捌いて、坂本さんに焼いてもらうと、この焼きたてを、自分の焼いたがをすぐ切って食べた。「革命」だと言いました。革命だ。だから彼は、いろんなところで「日本にはこんなうまい食べ物がある」ということを言っています。

しかし、もう釈迦に説法になりますけど、カツオぐらい難しい魚はなくて、肉ならA5の肉を買えばうまいですよ。マグロでもシッポのところを切ってちょっと見て、脂が乗っておれば、これ、うまいんです。ところがなんぼ新しゅうても、なんぼ脂が乗っちゃうっていいよってもゴシはゴシなんですよ。食えません。これがカツオの難しいところで、新しかったらええというものではないんですね。

そこでやっぱり本当に美味しい、生食で美味しいカツオをしっかりと提供するお店ですね、池澤さんのようなお魚屋さんであり、また、竹内さんのような飲食店であり、そういうところをやっぱりしっかり増やしてですね、まずは県民に本当の美味しいカツオを食べてもらって、みんながカツオのサポーターになると。

全国展開をするためには、まずは地元を固めなきゃなりませんので、そういう意味では、本当に美味しいカツオ。なんでしたら中土佐町に来てもらったら大正町でもどこでもやっていますので、熱々のタタキも食べられると思います。ぜひお願いをしたいと思いますけども、当然、県下、いろんなところありますので、ぜひ、本当に美味しいカツオを食べていただいて、やっぱりカツオはすごいねということを再認識していただきたいなと私は願っております。

そして、どうやって今度、全国に訴えていくかでありますけれども、カツオの資源量の話が出ましたけども、水産庁の統計というのは当然、お役人はやっぱり政治家に弱い。政治家は自分の支持者に弱い。今日は中西祐介参議院議員がお見えでありますけれども、また、県選出の国会議員の秘書の皆さんがお見えでありますけども、やっぱり政治も旗を振ってもらわんとなかなかうまくいきません。しかし、政治家はやっぱり当選してなんぼですから、自分の支持母体といいますか、大きな産業界。例えば、まき網船の話をする、大きな水産会社がバックにあるわけありますので、なかなかそれを覆してやっていくというのは厳しいのがあるのかもしれませんが、そこを一番……。政治家が弱いのはやっぱりそういう自分たちに一票を投ずる国民でありますので、そういう皆さんがこれはやらないか

んぜよという話になってくれば、間違いなく政治家も動いてくれますし、そうなるとう当然のことながら役人が動きます。

宮原さんは、水産庁の次長をされて、水産総合研究センターの理事長をされて、WCPFCの日本の代表でいつも発言をされてるんですね。本当に素晴らしい方で、そういった方がいくらかもの言っても政治がついてこんとか、産業界がついてこんということになると、なかなか、二階に上げられて梯子を外されたみたいな格好になりますので、やはりわれわれがしっかりとサポートできるような、そういう体制をつくる。それがまさにこの高知カツオ県民会議ではないかなというふうに私は思っております。

したがいまして、尾崎知事が旗振って、産業振興計画やっておりますけれども、まさに高知がそのリードオフマンになって、素晴らしい方が今日、お見えですので、ぜひ皆さんのお力をいただいて、広くこのカツオ資源の問題について、全国民にPRできますように。よろしくお願いをしたいと思います。以上です。

○岡内（株式会社丸三 代表取締役会長）

はい。カツオの町の町長さんならではの本当に熱い思いをありがとうございました。

政治を動かすという点は、それは、当然今までも議論をしてきた事柄でありますけれども、ひとまずこのカツオ県民会議は……。

○――

土森さんに。

○岡内（株式会社丸三 代表取締役会長）

ちょっとだけいいですか。ひとまずこの県民会議に関しては、県民運動としてまとまってわれわれのパワーをあげていこうということが一番の主眼です。

まあ、どうぞ。じゃあ。

○土森（高知県議会議員）

冒頭に岡内さんから県議会で質問した土森ということを紹介いただきました。せっかくの機会でありますし、また、ただ今、池田町長が熱弁を振るいましたので。政治という話も出ました。

実は私、この質問に取り上げることのきっかけは、単純なきっかけでした。カツオが大好きで、本当に美味しいカツオを食べさす居酒屋がありまして、そこに行くと、「今日はカツオがないぜよ」と。また、「今日はカツオはあるけど、ちょっと高いぜよ」と。これ、おかしいね。カツオが土佐に揚がらんなっちゃう。何とか原因をつかまえないかんねということで調べ始めました。

約2カ月半くらいかかりました。調べて、そして、中西部太平洋地域、ここでごそつと

3,000トンのまき網船で、成魚にならない小さなカツオを捕ってるということがわかりまして、それからいろいろ調べて、これは何とかせないかんということで議会で質問をさせていただきます。そして、尾崎知事も大変関心を持っていただいております。

そういう中で、受田先生、それから水産振興部……。この水産振興部は今までの取り組み、そして、受田先生が……。初めて、そのときに県民会議ができるという話を知りました。嬉しかったですね。そういう会議ができる。そして、われわれとともにカツオをどうしても日本列島に揚げていく。土佐の魚ですからね、何とか守りたいという運動と一緒にできるということを非常に嬉しく思っております。

そしてまた、2月議会で、今日、質問に取り上げるということで勉強に来ておりますが、桑名龍吾県会議員が自民党（高知県支部連合会）の幹事長として代表質問でカツオの問題を取り上げる。こういうことになっております。

当然、われわれこういう議会での取り組みは、全国に拡げていくという、そういうことにつながってこなきゃなりません。ただ、政治の力だけではどうしようもありません。やっぱりこういう高知カツオ県民会議、こういう組織こそが全国に拡がって行って、国民あげて取り上げていく。国際会議の場で勝負するわけですからね、それぐらいのエネルギーがないとなかなか目的が達成できないという、そういう思いがありまして、自分たちも一生懸命になって頑張っていく。そういう取り組みをしております。

そして、この2月議会終了後、直ちに、今日、中西祐介自民党の水産部課長がおいでありますが、要望に行かしていただくということになっております。当然水産庁にも行きますし、政治的な活動もしていきたいというふうに考えております。ぜひ力を合わせて、土佐の魚、カツオをどうしても守り抜く、そういう気持ちでお互い頑張っていこうではありませんか。決意を込めて発表させていただきました。ありがとうございました。

○岡内（株式会社丸三 代表取締役会長）

はい。ありがとうございました。

それでは、時間がだんだんと迫ってまいりましたが、ご意見、ご質問ございましたら。どなたかございませんでしょうか。

少し終わりが早うございますが、この後、大勢の方に懇親会にも出席をいただくこととありますから、懇親会の席でも熱い議論をしていただいて、まさに県民力を結集いただくということを心からお願いを申し上げまして、本日の県民会議の設立の会を終わらせていただきたいと思います。

長時間ご審議にご参加をいただきまして……。

○――

中西先生が。

〇――

懇親会のとくに。

〇――

けど、ここしかおらん人もおるし、今言うてもろうたらどうですか。

〇岡内（株式会社丸三 代表取締役会長）

そうですか。わかりました。

時間があるようですから、中西先生に懇親会のとくに挨拶をいただきたいと思いましたが、帰られる方もおいでるようですから、少し今日のことについての先生のお考え、またご意見を賜りたいと思います。

〇中西（参議院議員）

はい。皆さん、こんにちは。ご紹介をいただきました自民党水産部会長を拝命しております、参議院議員の中西祐介でございます。一昨年来、高知の皆様には大変お世話になりました。私も高知愛というものを持ちながら頑張らせていただきたいなと思っております。

今日は、国会開会中で高知選出の先生方もお忙しいわけではありますが、今、水産部会長という部会を掌る役割をいただいておりますので、比較的全国の漁港、漁場に足を運ばせていただいて、水産現場の課題について取り組ませていただいているところであります。

今日、発足といいますか、準備会をされたこの「カツオ県民会議」は、極めて大きな意義があるんじゃないかなというふうな思いを持って、今日は来させていただきました。

と言いますのは、この魚介類に対して、これほど県という単位で結束をして、物事を動かそうということが、多分、これまで全国でどこもなかったわけであろうと思っておりますので、そういう意味で、非常に大きい会議だなと思っております。

そんな中で私は、二つの側面でこれからよりお力添えをいただきたいなと思っております。

それはまず一つは、今日のプレゼンテーションの中にもたくさん出てまいりましたが、カツオをいかに国内での漁獲高を確保するかということを考えるならば、間違いなく WCPFC の中で、各国の漁獲制限、それぞれの国がどれぐらいまで捕っていくならば、このカツオという資源が持続可能なものであるかということを経済社会の中ではっきり証明をしていく必要があると思っております。

日本や、あるいは台湾の立場でわが国の近海で捕れなくなった。何とかしろ。それは倫理観にかなっていないということをいくら声高に言っても、当然たくさん捕れている国々は、そういうことに納得しないわけなんです。

なぜならば、日本と違って、日本以外の国々は水産業がすべて、いわば民間企業の生業だからなんです。浜に根付いた産業じゃないんです。たくさん捕ってたくさん売る。そ

ういうふうな生業に、基盤になっているものですから、それ以上やったら世界の資源なくなりますよという大義を科学的根拠を持って示さなければいけないと思っております。

今日例示されたアーカイバルタグというものもありましたけれども、日本がやってる調査でまだ行き届いてないのは、実はアーカイバルタグというのは大きな魚にしかつけられないんですよ。北緯 20 度以下、あるいは南緯 20 度以上の熱帯海域で生まれてくる小さな幼魚にそのタグをつけることができないから、そこで生まれた幼魚が日本海域までやっているという証明が実はできていない。だからこうしたことを水産庁、国が中心に先導してやっていくということと同時に、国際会議の場でしっかりした根拠を示せというふうな圧力を、ぜひ県民、この会議をあげて国に対して突き上げていただきたいと思っております。

先ほど政治の課題というものもありました。当然、結果責任は政治が負うんですが、私が見る限り、今まで水産に携わっていなかった人間が今部会長を拝命して、冷静に見ておいたら、何も水産庁が怠慢であるからこうなっているわけじゃないなと思っております。それは、農林省という組織があって、水産庁というのが外局から入って、今、農林水産庁になっているわけですね。地元にも大臣もおられますので、水産行政、あるいは水産外交というものを推し進めるために、県民あげて何とか外交交渉しっかりやりなさいという声を、この会議をあげて伝えていただけたらありがたいなと思っております。

もう一つ、私は大事な側面があると思っておりますのは、資源に対する多くの消費者に対する考え方なんですね。例えば、マグロが捕れない。「皆さん、明日からマグロ買えませんよ」と言ったら、「私、マグロ好きやのに困る」と言われる人がたくさんおられます。しかし、輸入ができれば民間企業ですから、例えば、スーパーマーケットさんやいろんなお店さんもマグロを食べたいというニーズがあれば、海外から買うわけですね。ですから、消費者の方々の理解も、実はマグロにしろ、ウナギにしろ、このカツオにしろ、十分理解がないと消費というものからもアプローチしてもらっては極めて大事だということをこの会議の中でも大事に位置づけていただければありがたいなというふうに思っております。

いずれにしても、画期的な会議のスタートだと思っておりますし、微力ながら私も水産を束ねる仕事をさせていただいておりますので、高知県の先生方と力を合わせて何とか高知のブランド、2020 年の東京オリンピックのときに、東京に来られた世界の方々が高知のカツオのタタキというものを食べられるというふうな環境にするために頑張ってもらいたいと思っておりますので、ますますの会議のご繁栄と、そして皆様のお力添えを心からお願い申し上げます。どうぞよろしくお願いたします。

○岡内（株式会社丸三 代表取締役会長）

どうもありがとうございました。

それでは、大変長時間になりましたがどうもありがとうございました。

今後とも県民運動としてどうかよろしくお願いたします。

○司会（松岡・高知広告センター）

それでは、お時間が来てしまいましたけれども、少しご案内をさせていただきます。

一つは、紹介が遅れてしまいました。今、お帰りになっていますが、桑名県議様にもご参加をいただきまして誠にありがとうございました。

それから、今回の「高知カツオ県民会議」拡大準備委員会開会に際しまして、応援のメッセージをいただいておりますので、お名前のみ、ご紹介をさせていただきます。

衆議院議員・中谷元様。衆議院議員・農林水産大臣・山本有二様、衆議院議員・石田祝稔様。そして、今日、ご多用の中、お越しいただきました参議院議員・中西祐介様。そして、参議院議員・高野光二郎様でございます。ありがとうございました。

事前に懇親会へのご参加をいただいている皆様にご案内いたします。5時半より隣の会場で開会いたしますので、今しばらく準備に時間がございます。ロビーのほうでご休憩をいただいております。準備ができ次第ご案内をさせていただきます。ご欠席のご連絡をいただいている皆様は、お忘れ物のないようにお帰りいただきますようお願い申し上げます。

本日は、長時間の会議、誠にありがとうございました。お疲れさまでした。